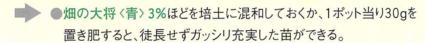
キュウリ

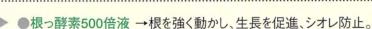


育苗

床土(培土)



散水時に散布 (葉面散布・潅水)



- ●花咲くCa液500倍 →茎葉を厚く充実させ、健全な体質を作る。
- ※播種後、接木まで毎日~3日間隔、1000倍の交互散布で茎が太くなる。
- ※接木4日後から、3~7日間隔で、最初だけ1000倍、以後500倍で交互に、 葉上からタップリ散布。(ただし状態により適宜選択)
- ※定植5日前には、苗の引締め・仕上げに、Ca液を散布し充実させる。

(10アール当り)

本畑の地力 なるべく早い時期に投入し、 ●ラクトバチルス600g 作り なるべく深く耕耘する →通気・保水・保肥性がよく、深層まで肥沃な土に。 (定植までに20日以上の ●堆厩肥2トン以上(なるべく多く) 間隔をおく) ※前作の茎葉もなるべくスキ込み。 秋~晩春の促成ハウス・長期栽培(目標収量15トン)の場合・・・ ■尿素80kg(N:40kg前後) ※堆厩肥が少ない場合には 硫酸カリ60kg 追加。 初秋~冬の抑制栽培(短期)、夏キュウリの場合・・・ ●尿素60kg(N:30kg前後) ※堆厩肥が少ない場合には硫酸カリ40kg追加。 ※このチッソは微生物により有機化・地力化して、ジワジワと効く 定植時には土壌EC:0.2以下と、無機チッソが抑えられる。 ※キュウリ畑は多量のチッソにより必ず強く酸性化する。もし土 壌pHが極端に酸性(pH:5.5以下)なら、地力作りにも畑の 大将〈青〉60kg以上を投入する(栽培中は40kg程度)なお 下記、整地時にも施す事。 本畑の整地時 整地・ウネ作り時に散布 ●畑の大将〈青〉60kg (全面散布、及びウネ上へ ※土壌pH:6.5以上と高い場合は田畑の大将〈赤〉を施す。 の散布) ※カルシウム量はチッソ量以上に、多めの施用を推奨。 ●マンゾク粒状50kg →根張り・生長促進、線虫・ツル割れ・疫病の予防。 ※特に心配な園で農薬の土壌消毒をした場合は、毒性が抜けた 後に米ヌカ等に混ぜて、ラクトバチルスを補う。(同時施用可能)

(10アール当り)

| 時 期 | 方 法 | 資 材 と 施 用 法 |
|--------------------|----------------------------------|--|
| 植付け時 | 苗のドブ漬け・植付け直後 の潅水 | ・根っ酵素500倍液→活着・初期の根張り促進。(必須)線虫・ツル割れ・ツル枯れ病の軽減。モザイクもかなり抑制。 |
| 定植後1ヶ月 (収穫開始の前) | 〈根と体質を作る〉 初期の潅水使用 または葉面散布 | ・根っ酵素2~5ℓを潅水(倍率は200倍以上、適宜) ※定植から半月間のうちにタップリ深く潅水し、太根を伸ばす。 (通路中央に穴を掘ってあれば、20日前後でそこに根が達す) ・花咲くCa液2ℓを潅水(200倍以上、適宜)または葉面散布 ※定植後20日頃にカルシウムを与えて、雌花の開花を健全にする |
| 収穫中の潅水 | 半月(または1月)の周期で、 潅水施用 3種を繰返し | 根っ酵素2~5ℓを潅水→根の強化・尻太などの解消。 アミノ酸液(または自家製アミノ酸液肥)20ℓを潅水 →栄養補給。 花咲くCa液2ℓを潅水(または葉面散布) →引締め・生殖生長。 |
| 追肥 | 収穫開始後1ヶ月以降、 1〜2ヶ月ごと | ●硫安20~30kg 上記の潅水施用で不足な場合、状態により。 |
| | | ■畑の大将〈青〉20~40kg→硫安と同時施用して栄養バランスを維持。※栽培中に土壌が酸性(高EC)になった時は、カルシウムで回復 |
| 葉面散布 | 栽培中の草勢調節 葉面散布 (7日ごと交互、適宜) | ●花咲くCa液500倍→雌花を強くする、ベト病・褐斑病の発病時。●根っ酵素500倍液→根・導管の強化、草勢維持、肥大促進、茎葉生長。 |



カルテック農法では強い花が咲く。 慣行農法ではイボが少ない。 カルテック農法ではイボが多いの が特長。